
積雪50センチメートル

ささぐれタロー

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

積雪50センチメートル

【Nコード】

N1336H

【作者名】

ささぐれタロー

【あらすじ】

藤戸君を大好きな遼くん。始まりはドアを蹴ったから？

（前書き）

この作品。実は去年10月に取り掛かっていたのですが…。
すっかりこつてり忘れていて。
なんと一夜で完成させました！
わーぱちぱち。
では、見てみてくださいw

中学一年生の時。俺は荒れていた。いや、そのときだけではなく今も。

そんな中1の冬、サボってるのがバレて俺は教師から逃げていた。どこに隠れようかと学校中を歩いてたら、特別学級。いわゆるシンシヨーのクラスが目についた。

丁度いい、シンシヨーとうるさくねえ先生だけだし…と思ってその教室のドアを、何故だか分からないが蹴ってしまった。

ガダンッ！と大きな音をしたその直後、ガラスとドアが開いた。

俺は少しキョドった。自分落ち着かせて…息を揃えて顔をあげた。ときん。と胸が鳴った。

目の前にいたのはシンシヨーではなかったから。そのときはそいつがなんでそこにいるのか知らなくて。藪から棒に

「…な…なんで、こっ…ここいんの?!」

と、さもそいつのことを知っているかのような口調で聞いた。

自分でも笑えるぐらいワケが分からなかった。相手も戸惑っていた。

そいつの胸を見ると名札がついていた。…藤戸。^{ふじと}

そいつは、凄く可愛かった。凄く凄く、可愛かった。

けどそいつは…藤戸は何故だか悲しそうだった。

「なっ…なんで!…なんっ…」

落ち着け俺!と自分に言い聞かせた。キョドリすぎだろ俺。

藤戸はもの凄く困った顔をしていた。俺もまともに喋れない。

「なんで…なんだ…なっ…な、なんか…あの…そのっ」

ぐすつ。と胸を深く深く掘られた。致命傷だ。

「あっ…あの…」

そいつが初めてコトバを喋った。なのに俺は

「な…なあ…な、なん…なのっ?お前?」

とアホな質問をした。

もちろんワケが分からないような…意味不明という顔をしていた。どつきんどつきんどつきんどつきん。胸の鼓動は激しくなっていくばかりで、一向に収まる気配はない。

すると階段を下りてくるスリッパの音がした。

俺は焦って、どうしようかと悩んでいると。変な行動に出た。

そいつをぎゅーっと抱き締めてしまった。

すぐに、何をやっているんだ俺！みたいな感じになっても、頭が混乱し過ぎてその体制のままその教室に入ってしまった。

それで、その格好で倒れて物陰に隠れた。

どつくんどつくんどつくんどつくん。俺の胸は絶好調だった。

藤戸は俺の胸に耳を傾けてた。やばい。聞かれる。

パタパタパタとスリッパの音が通り過ぎたのを確認すると、藤戸を放して立ち上がった。

「なっ…なんなんだよっ…お前！」

と言。むしろそれは藤戸のセリフだ。なんで俺こんなこと言ったんだ…。

俺は今外にでるのもなんだし。と、ドアを閉めて何をするか考えた。藤戸はさっきのもの悲しそうな顔からニコニコと笑顔に変わっていた。

可愛かった。

「あっ…あの…さっ。ほっ…ほかの…奴らは？」

むしろこの言葉も俺が聞かれるべきだ。それなのに藤戸は

「ん…あ…えっと…あっ…あの…その、なんか遠足？…みたいなのにいっちゃって…」

と、ニコツと答えてくれた。イマイチ分からない。

「ふう…ん…お前は？」

と聞くべきじゃなかった。何も考えずに俺はそう呟いた。

その言葉を聞くと藤戸は顔を一变さして、涙ぐんだ。

「え…う…あのっ…そ……そんっ…その…」

俺はすぐに察した。中1のバカな俺でもそんな時はさすがにヤバイ雰

困気だったのを。

「あつ…べつ…べつに、いつ…いいたくねーならいいよ!」

なんか、凄くドキマギした会話。

その日俺は無事に先生に見つかることなく授業サボれた。

そして、その日を境に特別学級に通うようになった。

ただ、藤戸の笑顔を見たいために。

そう、俺は奴を胸に抱いた瞬間…いや、初めて見たときから恋におちたのだと思う。

積雪50センチメートル

奴の名前は藤戸、寛野^{かんの}。かんちゃん。カン。かんかん。とか呼ばれてる。

俺は普通に藤戸と呼んでる。かれこれもう2年の付き合い。

藤戸も俺のことを警戒してない。……はず。

藤戸が何故“ココ”にいるのかと言うと、小学生時代のイジメらしい。

凄く酷いイジメで、わざわざ東京からここ秋田まで引っ越してきたらしい。

それでもみんなと会うのが怖くて出席を取ってはこうして“ココ”にいるのだと。

俺は授業をサボる& a m p・藤戸に会いたいがために“ココ”に通ってる。

だから、“ココ”の連中とも仲がいい。

みんな特別な病気を持った奴ばっかで全部聞いたことのない病名だった。

藤戸はうつ病らしい。俺は、その病気さえどんな病気かあいまいだったけど、心の病って聞いて、絶対俺が治す!とか思っちゃってた。

いざ、藤戸を目の前にすると何も喋れない。だけど、不器用な会話で心を開いてくれた。

絶対、俺が治そうと改めて最近誓った。

「あー…さみい…」

俺がそんな呟きをすると、いつもニコニコして答えてくれる。

「うん、冬だねっ…てゆうか、なんか今日雪ふるらしいよ？」

藤戸は凄く可愛いのだ。うん、もんの凄く。

「まじで？…通りで寒いなー…なー藤戸」

藤戸の頭を撫でる、髪がさらさらだ。キレイだし。

それに、なにより、凄く嬉しそうな顔をしてくれる。その顔が一番好きだ。

肌もスベスベ。このまま、キスしたい気分だ。いや、キスしてえ！

「うん！」

裏表のない表情で素直にうなずいた。

こいつをこんな風に思い始めた…つまり、恋をしていることに気がついたのは中2の夏くらいだった。とても、夏服が似合ってたと思うキスをした。

思わずキスをしちゃったのだ！…ああ、恥ずかしい。まあ、その後何もないんだけど…

現在中3の冬、入試に向けてまっしぐら…でも、俺は高校行く気なんてないし。

鳶とか配管工とかしようかなと考えてる。

だけど藤戸は高校に行きたいらしい。二人で一緒にいる時間が少なくなるじゃん…

てゆうか、高校…ってか中学卒業したら二人どうなるんだろう。

離れ離れには…ならないで…っ…かなるな！いや、ならせん！

俺はずっとずっとずっと藤戸と居たい。

「なっ…藤戸？」

思わず口に出た。

「うん？…あ、うん！」

分からないけど、とりあえずうなずいてくれた。

「遼^{りょう}…」

と、藤戸に急に呼ばれてビックリした。

「ん？どつた？」

藤戸が珍しく問いかけてくれて嬉しかった。

「あのさっ…あの…ちゅっ…中学校で一番のっ…一番の思い出ってなに？」

…一番の思い出かあ。考えたこともねーなあ…。

「ん…なんだろ？修学旅行とか？」

俺はありがちな答えを言った。

修学旅行か…確か、沖縄に行ったよなあ…。7月に行って糞暑かったなあ。

ああ、別のクラスだけど藤戸と一緒に部屋になれて舞い上がったたっけ…バカみてーに。

一緒にの部屋になる理由は気に入らなかったけど。

また、キスが出来た。

また、キスが出来ちゃったのよ…ああ、恥ずっ！…てゆうか、上でなんにもないとかいったのに…。まあ、そこは置いといて。

えと、いっぱい写真とったなあ…。あいつとふたりきりだけの写真の方がいいかしんね…

美ら海水族館にもいったなあ…意外と短い。ぶっちゃけ、短すぎ。

「ぶっ…どうしたの？遼？」

いきなり藤戸の顔が前に来て、顔が恥ずかしすぎて真っ赤になった。

「ああ…考え事してたんだ？」

俺がしどろもどろになってると答えてくれた。

「いっぱい、いい思い出あった…よね？……そう言えば、憶えてる？」

また、藤戸の顔が一瞬にして悲しそうになった。

俺は落ち着いたところで聞き返した。

「なっ…なにを？」

「えっ？…あつべ…つべつに…べつに…なんでもないよ！」
恥ずかしそうに手を激しく振った。

あ…もしかして……。

「キス？」

まあた、藪から棒に言った。

「あ…」

みるみる藤戸の顔が真っ赤になってく。可愛い！

「あ…あ、あ…あ、の…」

何かいいたそうだ。

「んー…何？」

「あ、あ…ああ…あの、そっ…そ、そそっち？」

……え？そっち？ってどっち？

「え…そ、そっち？…ってどっち？あのさ…お前の憶えてる？…って

…えと、んと……どこ？」

どこ？…ってのもおかしいな。ポリポリと頬を人差し指で掻いた。

「どこっ…って…どこ？」

ですよー。どこだろう。そんなことより今は思いで浸るよりも、
もっと大事な事があるきがする。でも、なんだろう…

「ま、いいんじゃない？」

俺はどこでもいいってことと大事なものはどうでもいい。どっちの
意味で言ったのか分からないけど、それが本心だった。

「え…あ、うん」

そう呟くと藤戸は顔を横に向け、窓のほうを見た。
俺もつられて窓を見た。

「あ」

と二人の声が重なった。

雪が降ってる。11中旬、初雪だ。

12月21日。

もう少しで学校が終わること。そしてクリスマス、年末が近づいてクラスの奴らも浮かれてる。

俺はなんとなく居心地悪くなって1時間目が終わって藤戸のところに行った。

パタパタと、誰もいない階段を降りる上履きの音が響いた。

その音は嫌に静かで、なんだか心細くなった。

「おはよ」

その声とともにガラツと扉を開ける。

「あ、遼…。おはよ…」

藤戸は腕を枕にして、その上に顎あごを置いて応えた。

藤戸は、1200ピースのパズルを黙々としていた。

藤戸ともう一人、初期の解離性かいりなんとかかんとか障害って病気の橋は野しのって奴と一緒にピースを埋めてた。

完成した絵は、誰が描いたのかは知らないけれど、菊の絵になるらしい。

俺もその輪に加わった。

ココは、落ち着く。

ちつくちつくと、時計の秒針が動く音だけ。

凄く、凄く、静かな部屋だ。

カタツとピースがハマる音がする。

「やった。あとちよつと…」

藤戸が嬉しそうに呟く。俺もその小さな笑顔で思わず顔が綻はなぶ。

何となく、窓を覗く。空は青空で、静かに鳥が飛んでいた。

だけど、その青空に反する様に、地面は真っ白で…。

今日、雪は50センチメートル積もってるらしい。

たいへんだった。俺の家は学校へ徒歩で通える距離だからいいけど、チャリ通の奴は自分の足でわざわざ雪を掻かないと進めなかった。車道はすぐに雪が溶けるし、雪かきはするけど。歩道まで手が回っていなかった。

俺はざつくざつくと、雪を踏み。足跡残しながら学校へ向かった。我ながら子供だった。雪を見るとなぜか童心に帰る。別に珍しいわけじゃあないのに…。

凄くおかしくて、凄く楽しい。

「そうだ、今年も一緒にクリスマス、過ごそうな」

息を吐くように、静かに言った。

藤戸は顔を上げ、首を少し傾けたあと、うんつと首を縦に振った。そして、また。腕に顎を伏せた。

去年のクリスマスは、ホワイトクリスマスだった。

ちらつく様に粉雪が舞い、恋人たちは嬉しかった。

雪も積もらなくて、凄く凄く思い出深いクリスマスになった。

そのクリスマス。俺ん家で過ごすことになっていた。

俺は藤戸に言おうとしてた。

「好き」

ってことを。

だけど、なかなかどーして、こう…機会が解らなかった。

俺はせっかく、気取って藤戸の誕生石のサファイアのネックレスを買ったのに…。

腕を肩に回すことしか出来なかった。

藤戸からの贈り物。それは、シルバリング。

そこら辺の安っぽいやつとは違って、凄く綺麗だった。

そしてなにより、思いが伝ってた。馬鹿な俺でも気付いたくらい…。

俺もいつか、エンゲージリングを藤戸に送りたい。

凄くキザに思えるかもしれない。だけどそれだけ、藤戸を愛していた。

結局このクリスマスは、髪を梳き頬を撫でることしか出来なかった。だけど、悔しくなかった。心残りもなかった。

ただ、それだけで胸が一杯だった。

どうしよう、堪^{たま}らなく藤戸が好きだ。

胸が苦しかったのを思い出した。

今年は、絶対。言う！

必ず藤戸に言う！

言うだけ、OKを貰おうなんて思ってもいない。

だけど、OKを貰いたい。

俺は左手でぼりぼり頭の後ろを掻いた。

「どうしたの？」

藤戸がこつちを向いて聞いてきた。

俺は、目を流して、

「や、別に……」

それを聞いた藤戸はまたパズルの板に目をやって

にんまり笑った。

「そつ。じゃあ、パズルの続きしよつ」

「あ、ああ」

ああ……なんて可愛いんだろうか。

どうして藤戸はそんなに俺の胸を衝けるのだろうか。

その長い睫毛も、俺の心を刺してくる。

その不満げな横顔も、俺を掴んで放さない。

外は積雪50センチメートル。

だけどそれよりも、俺が藤戸を好きな気持ちは積もっていった。

おしまい。

(後書き)

藤戸饅頭…。

実際新潟が雪が50センチも積もるのか知らん。
てか、まず標準語。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1336h/>

積雪50センチメートル

2010年10月28日08時49分発行